## (一) 末代の燈明台

異安心で破門されたという言葉を聞けば、震えあがるほど嫌な言葉であるが、よく考えてごらんなさい。法然上人は師匠の叡空上人から破門され、親鸞聖人は叡山から破門され、近くは金子師も暁烏師も大谷派から破門されたので、大沼も本願寺派から破門されて、一人前になったなあと溢れる慶びに感謝している。普通の線を突破し、頭角を顕わさなければ、衆目の的にはならないのだ。

物は比較しなければ長短、方円、美醜、軽重は判定できない。真宗は易いやすいと言っているけれども、感情で易いのか、他人の求道を聞いているのだから易いのか、机上の空論だから易いのか、実地に求道し、開発し、八万の法蔵を諦得して、易いという言葉もいらない易いのか、比較してみなければ、易さも測定することはできない。

浄土真宗の道俗が悉く正しい安心に住して死後を夢見ておらるる中に、必死の求道をさされて真仮の分際を明瞭に宣説するから、総攻撃を蒙るのは当然であるけれども、正安心と異安心とをお聖教の定規に当てて、信仰の実地に照し出して比較して見せますから、この書物を初めから放棄せず、お気には召すまいが寛大な度量をもって最後までお読みください。異安心々々々と早口で言わずに落ちついて呼んでごらんなさい、いい安心ですよ。

（前者）正安心と自負しておらるる方々にお伺いいたしますが、あなたは他に就職する能力がないから、嫌いやながら坊主になられましたか、寺に生まれたから仕方なしに僧侶になられましたか、後生の一大事に驚いて発心されましたか、寝食を忘れて求道なさいましたか、最初のスタートが一生を左右しますよ。

真宗は絶対他力と聞かされて、何にもしないのを自然と思い、法に眼のついたのを他力と思い、計らわないのを無我と思い、合点したのを信仰と思い、自分は宿善が厚

いから骨を折らずに素直に聞いたと自惚れ、了解のできたのを他力廻向の信と思ってはいませんか、信仰はいつとはなしに浸透するものであって、今現在はっきりわかるものではなく、死にさえすれば他力不思議で五十二段を超証していただくので、この世ではどうもなれないものだと心得てはおられませんか。

（後者）異安心といわれた私は母の必死の念願により、後生の一大事が苦になり、名号を聞けば聞くほど、聞かぬ機が腹底にいることを知らされ、光明無量に照されて罪悪深重を知り、寿命無量に反映して無常迅速を知り、今の苦悩を今晴らしていただきたいと必死の求道となり、そのお育てを蒙ったのを調熟の光明というのであり、自分一人が三千世界の余り者の逆謗闡提の屍であり、素直にない極悪最下の悪性が知らされ、往生の望みの絶えたときの捨自帰他は同時であって、三世の業障一時に消滅して鮮かに明信仏智し、極善最上の名号に摂取せられた正定聚不退の大慶喜を獲て、信前信後の水際を明瞭に諦得できたのだから、真仮の分際をはっきり説かずにはいら

れないのであります。

前者は(1)自分の求道ではなく他人の糟粕をなめているのだから、合点するだけで真剣味がない。

(2)法体成就の機法一体を教え。

(3)死後の往生を教え。

(4)身命終を教え。

(5)名号に眼を向けることを教え。

(6)凡夫は現生ではどうもなれない死んで五十二段の証果を得る。

(7)素直にない者が素直に聞けと素直に

後者は(1)自分の必死の求道だから、猛火の中も辞せない精神的に根本的の相違がある。

(2)信念冥合の機法一体の実地の開発を教う。

(3)現生不退を教う。

(4)心命終を教う。

(5)名号と一体になることを教う。

(6)現生で正定聚に住した者が死後滅度の証果を得ると教う。

(7)素直にない者が開発したとき素直にな

ない者に教え。

(8)信仰はいつとはなしに頂くのだから水際もなければ角目もないと教え。

(9)凡夫ははっきりするものでないと教え。

(10)凡夫にはこれでよいということはないと教え。

(11)凡夫は喜べる者でないと教え。

(12)機を包んで法を有難がることを教え。

るのだと教う。

(8)三世の業障一時に消滅したのだから信前信後の水際は鮮かに知らされると教う。

(9)明信仏智ではっきりすると教う。

(10)往生の一段大満足があると教う。

(11)大慶喜を獲、心多歓喜の益で常に喜べると教う。

(12)法が機に生き機が法に生きたことを教う。

要するに対岸の火事を眺めているものと、いま猛火に包まれているものとの相違があり、岸に腰掛けているものと溺れているものとの立場が違い、お悔みに行ったものと実子を喪うたものの悲愁の程度は同じとは言えない。演習と実戦の差異があるのだから喜びに天地の相違があり、雲泥の差異のあるのは当然ある。

(一) 譬えば第十八願から実例をあげてみよう。「設ひ我れ仏を得んに十方の衆生、至心信楽して我国に生れんと欲し、乃至十念せん、若し生れずば正覚を取らず。ただ五逆と正法を誹謗した者は除く」

(正安心の説明) 法蔵菩薩が仏になっても十方の衆生が至心信楽して我国に生れんと欲し(信心正因)、乃至十念した者が(称名報恩)若しお浄土に生まれなかったら正覚を取らずと誓うておらるるのだから必らず生れられる、十劫の昔に正覚を成就されてあるのが証拠ではないか。自分も素直に聞いているのだから素直に聞けと教えて、終りの抑止門の八文字を自分の身に当てて説明する人が一人もいない。

（異安心の説明）十方の衆生よ、素直な者は三千世界を探したって、一人もいない。みな逆謗の屍だぞと本願の正所被の機を出したのだ。除くとは、自惚れや機執を除くために光明無量で照し出し、若の一字は、難化の衆生を摂取する寿命無量の慈悲の極致を出してあるのだ。生まれずばとあるが生まれたか、ここが正安心と異安心の分れ道だ。死んで生まれるか、生きている間に生まれるか、体失往生の身命終か、不体失往生の心命終か、すでに勝敗はここで決まっているではないか。十方の衆生よ自惚れなよ、一人残らず逆謗の屍だ、若不生者の念力が貫いたとき、至心信楽己を忘れて称名さしていただくのだ。

(二) 大経に「仏彌勒に語り給はく、如来の興世、値い難く見難し。諸仏の経道、得難く聞き難し。菩薩の勝法、諸波羅蜜も聞くことを得るも亦難し。善知識に遇い、法を聞きて能く行ずること此れ亦難となす。若し斯の経を聞きて信楽を受持せんは難中の難、此の難に過ぎたるは無し」

㈢ 小経に「諸の衆生の為に、是の一切世間難信の法を説く乃至一切世間の為に、この難信の法を説く、是を甚難と為す」

（正安心の説明）この難の字は法の尊高を顕わすので、他力だから易いのだと教え、一度だって難しいと布教するものがいないのは、釈尊の説教を無視しているのだ。自分が実地に求道したことがなく、観念の遊戯をして死後を眺めているのだから易いのだ。

（異安心の説明）お言葉はわかる、教化の理解はできる、それは話であって、梃子でも動かぬ実機はどこで助かるのだと必死の求道をしているときは至難、甚難、極難であった。

㈣ 善導大師は「自信教人信、難中転更難、大悲伝普化、真成報仏恩」

（正安心の説明）広島県の海田市で講演しているとき、大沼を異安心だと攻撃している住職が読経に来て「善知識にあうことも」「一代諸経の信よりも、弘願の信楽な

おかたし」の和讃を引き、最後に「自信教人信」で結んでいる。書いてあるのを読んでいるだけで、身に体験はないのだ。それは邪見憍慢の悪衆生だから難中の難で、自分たちは素直に聞いているから信楽を受持していると自惚れるかも知らないが、自分が邪見憍慢の悪衆生であるという実感がないのだから信楽開発はしていないのだ。

（異安心の説明）合点は易いが実地は難しい、色もなければ形もない宇宙の大真理を、色もなければ形もない絶対の悪性が、見たよりも握ったよりも、なおはっきりと明信仏智することは、希有最勝のことである。けれども実地に体験したことを語る人が一人もいないのだから、一人も体験をしてはいないのだ。他力の法が難しいのではない、法は他力でも機に自力や疑いのあることさえも知らないのだから、どこで断除されるか知らないのだ。ただ法の上を流して通るのは観念の遊戯であって、機が開発さされなければ摂取された自覚はない。白覚のない人間に、必死の教化のあるはずがない。だから自信が難しいが、教人信はさらに難しいのだ。それを易いやすいと教え

るのだから、善導の意志に反しているから真の仏恩報謝をするものは一人もいないのだ。真の仏恩報謝は開発することだ。その他はみな枝葉報謝にすぎない。

(五) 聖人は総序に「噫弘誓の強縁は多生にも値い難く、真実の浄信は億劫にも獲難し、遇行信を獲ば遠く宿縁を慶べ」。信巻に「無上妙果の成じ難きにあらず、真実の信楽、実に獲ること難し」。「是を以て無上の功徳、値遇し難く、最勝の浄信、獲得し難し」。「易往無人の浄信」「世間難信の捷径」、和讃に

如来の興世にあいがたく　諸仏の経道ききがたし
菩薩の勝法きくことも　無量劫にもまれらなり。
善知識にあうことも　おしうることもまたかたし
よくきくこともかたければ　信ずることもなおかたし。
十方恒沙の諸仏は　極難信ののりをとき
五濁悪世のためにとて　証誠護念せしめたり。

真実信心うることは　　末法濁世にまれなりと
恒沙の諸仏の証誠に　　えがたきほとをあらわせり。
不思議の仏智を信ずるを　　報土の因としたまえり
信心の正因うることは　　かたきがなかになおかたし。

（正安心の説明）の人々は、この難の字がみな易の字に見えるのだから不思議だ。難しいとは言ったこともなければ、考えたこともないのだ。読みながら何を読んでいるのだ、牛羊眼ばかりだから聖人の真意は読んでいないのだ。自分たちは宿善が厚いから浄土門に入り、他力不思議に信順したと自惚れているが、どこまで流転すれば迷夢が晴れるのだ。畢竟百年以前の三業惑乱の余波を受けて、法体募り、本願ぼこり、十劫秘事、無帰命安心を固執して、機受の信相が皆無であり、他力不思議の体験を知らずに観念の遊戯をし、無力、放縦、安逸を貪る宗教となり、聖人の難信易行の真意を発揮するものが一人もいないではないか。

（異安心の説明）後生は一人しのぎだ。聖人はわれわれの身替りではない、身替りができるのなら、真宗の門信徒は全部聖人に任して遊んでいたらよいではないか。聖人は「彌陀の五劫思惟の願をよくよく案ずれば、ひとへに親鸞一人がためなりけり」と仰せられてあるではないか。聖人は先覚者だ、この道を通れば広い天地があると身をもって指導してくださってあるのに、真宗の道俗は寝ころんで「はあそうか」と合点し、安逸を貪ぼっていて同じ境地の証果が得らるると思っているのだろうか。二本差しておればみな武士だが、極意を究めたものは殆んどいない。法衣を纏うておれば殊勝の坊さんに見えるけれども、一休さんが朱鞘の刀を差して歩いていた。大勢人が集まったとき、「おい本当の刀に見えるかい、これは木刀だぞ、今頃の坊主は体裁ばかりで、真剣勝負のときは切れないのだ」聖人のお聖教を通して彌陀の名号と一体にならねば贋坊主だ、贋坊主から異安心といわれたら本坊主だ。そんな形に用事があるものかい。無量永劫流転をつづける実機が照し出されたとき、三毒の煩悩のような簡

単なものでなく、両親はなぜ自分を僧侶にしたのか、庄松や清九郎のような馬鹿であったら素直に聞くのに、勉強させたばかりにわからなくなったのだと親を怨んだときが五逆罪であり、こんな難しい法がどこにある（自分の機が難化であるとは気がつかないのだ）、唯も他力もみな嘘だ、十劫已来立ちづめといいながら、八千遍の御苦労といいながら、法龍一人をどうすることもできないのかと逆捻を掛けているのが謗法罪であり、上の心の感情はせき立てて、周章ているげれども、下の心の実機は「まだ死なない」と平気でいるのが闡提の機、この逆謗闡提の機を涅槃経に難化の三機、難治の三病と説かれたのだ。三世の諸仏に嫌われ、第十八願から唯除逆謗と捨てられて、どこまで流転をつづけるのだ。こんな心は真宗の道俗にはないのか、気がつかないのか、宿善が薄いから照し出されていないのか、もしこの解決がついたら、日本国中の道俗から総攻撃を蒙ろうとも、逆謗の屍が実機であることを徹底的に知らしてあげねばならないぞ、と猛然と進んでいるときが難中の難である。往生の望みの綱の

切れたときが久遠劫からの自力の絆が断除され、捨自帰他は同時であって、聖人は「ただ念仏して」と仰せられたので、あの「ただ」は普通のただでなく、八万の法蔵を読み破った「唯」だから無限の喜びがあるのだ。浄土真宗は唯じゃ、他力じゃ、死んだらお助けじゃと、大風に灰を撒いたような、馬鹿が闇夜に方角がわからず鉄砲を撃って的に当るはずがない。真の難しさを知らされてこそ、機執を離れた真の易さを体験さるるのだ。難中の難を突破した僧侶が、一人もいないではないか、いるのなら名利を捨ててなぜ浄土真宗を発揮しないのだ。聖人があれだけ難しいと説いておらるるのに、易いやすいと説いている僧侶たちは、聖人の裏切り者ではないか。それで厳護法城の第一人者と自惚れているのか、真宗が崩壊していることがわからないのか。

(六) 聖人は自分の信仰の順路を、彌陀の本願の上に三願の真仮あり、釈尊の三経の上に真実と方便を見出し、七高僧の聖教にその浅深を窺い、遂に無我の境地に転入せしめられた体験を書き連ねられて、「茲に愚禿釈の鸞、論主の解義を仰ぎ宗師の勧化

によりて、久しく万行諸善の仮門を出て永く雙樹林下の往生を離れ、善本徳本の真門に廻入して偏に難思往生の心を起しき、然るに今特に方便の真門を出て選択の願海に転入せり、速かに難思往生の心を離れて難思議往生を遂げんと欲す、果遂の誓い誠に由ある哉」この信仰の定規によって布教するものは、一人もいないではないか。

（正安心の説明）自分たちは自力の善根はできない、自力の称名も励むことはできないから、他力の称名を素直に称えさしていただいて、死んだら難思議往生を遂げさしていただくことだと、安心していると思っているのだ。

（異安心の説明）過去の原因によって現在の結果を得、現在の原因によって未来の結果を得るのだ。因果の法則は寸分も蹉跌がないのだ、現在の苦果は自業自得だ、修諸功徳、諸善万行、六度万行、身に契う善根は何でも修して行け、みな自分が結果を得るのだ。これだけできるから悪い処に行かないだろうと、往生の資助とするから雑行と嫌わるるのだ、往生の踏台にしないで善根を積めばよい、積まないから、よい果

報が報うてこないのだ。

この諸善万行のことを善根功徳とも、一切の諸行とも、六度万行ともいうのだが、六度とは生死の苦海を渡る六本の道、布施、持戒、忍辱、精進、禅定、智慧、どの道でも実行すれば人世は安らかに生活ができる。言葉を替えたら親切、言行一致、忍耐、努力、反省、修養。ところが人間は反対ばかりして不親切で、いうことと行うことが一致しない、腹は立て通し、遊んでいて、反省はせず、勉強せずに成功しようと望んでいるのだから、破滅のどん底に転落するのだ。六度の行は浄土門易行道では、修するものではないように思って、見向きもしないのだからよい行いもできないが、よい結果の報うはずがない。その六度の中の禅定を定善といい、布施、持戒、忍辱、精進、智慧の五度を散善という。この定散二善は自力であり、念仏は他力であるから、「万行諸善の仮門を出て永く雙樹林下の往生を離れ、善本徳本の真門に廻入して偏に難思往生の心を起しき」のところまで進出してきたのだ。

自力の諸善万行より他力の名号は勝易の二徳があって、超出しているとは承知しながら、名号を聞けば聞くほど、光明無量に照らされて罪悪深重が知らされ、寿命無量に反映して無常迅速が映し出され、逆謗の屍が猛火を噴きつつ乱酔している姿が自分であると知らされたとき、「今特に方便の真門を出て選択の願海に転入せり、速かに難思往生の心を離れて難思議往生を遂げんと欲す、果遂の誓ひ誠に由ある哉」の境地に到達さしていただくのだ。説かしていただいているのだが、大沼は聖人の三願転入の信仰の定規によって、八万四千の法門を自力の出世本懐の法華経に納め、霊山法華の会座を没して観経を説き、廃観立称して、小経で一日七日一心不乱と説き、大経に来たって、唯除逆謗と実機と顕わし、調機誘引して自力の出世本懐より他力の出世本懐に帰し、邪見憍慢の強硬難化の悪衆生を信順無疑の触光柔軟の妙好人に照育されるまでにどれだけお手間の掛ったことだろう。と三願転入を学問の定規に当てて信仰の剃刀で真仮の水際を鮮明にするのが異安心と言わるるのであって、三願も三経も聖

人の真意も無視して、死んだらお助けで浄土に暴れこもうとするのが浄土真宗の正しい安心と思っているのだから、恐らく一人も報土往生はしていないだろう。創価学会の人が言ったそうな。「今の浄土真宗の僧侶たちの信仰が、親鸞の信仰であるならば、恐らく親鸞は地獄に堕ちているだろう」と。反省すべきではないか。真宗の学者たちはいくら学問は勝れていても、実地の求道がないから真仮の分際がわからない、「真仮を知らざるに由りて如来広大の恩徳を迷失す」。聖人からお叱りを蒙っていながら学者連中は自分たちは素直に聞いていると自惚れているのだから、この学者連中を無眼人無耳人というのだ。松原致遠師が「おい同行心配するな、地獄は坊主で満員で地獄に堕ちてもお前たちはせり出さるる」と言われたそうな。これで真宗が衰滅するのが当然だ、聖人のお聖教を外れているのだ。

(七)　聖人の特徴の中の特徴は真仮の分際を明瞭にすることであった。御本典が三三の法門、六三分別が骨子であり、信巻別序には「然るに末代の道俗、近世の宗師、自

性唯心に沈みて浄土の真証を貶す。定散の自心に迷いて金剛の真信に昏し」と、門外を批判し、門内を撰別して、絶対他力、不思議の本願力を発揮せんと努力され、行巻には「三不三信誨慇懃」「専雑執心判浅深、報化二土正弁立」、と述べられ、化土巻には、「悲哉苦障の凡愚、無際より已来、助正間雑し、定散心雑るが故に出離其期なし乃至報土に入ることなきなり」と聖人を悲嘆せしめている者が、素直に聞いていると自惚れている真宗の道俗であるとも露ほども知らないのだから情ないではないか。和讃に

念仏成仏これ真宗　　万行諸善これ仮門
権実真仮をわかずして　　自然の浄土をえぞしらぬ。
聖道権化の方便に　　衆生ひさしくとどまりて
諸有に流転の身とぞなる　　悲願の一乗帰命せよ。
釈迦は要門ひらきつつ　　定散諸機をこしらえて

正雑二行方便し
助正ならべて修するをば
一心をえざるひとなれば
仏号むねと修すれども
これも雑修となづけてぞ
専修のひとをほむるには
雑修のひとをきらうには
報の浄土の往生は
化土に生るる衆生をば

ひとえに専修をすすめしむ。
すなわち雑修となづけたり
仏恩報ずるこころなし。
現世をいのる行者をば
千中無一ときらはるる。
千無一失とおしへたり
万不一生とのべたまふ。
おほからずとぞあらはせる
すくなからずとおしえたり。

聖人の御本典や御和讃に、こんなに方便と真実、信前信後の水際、真仮の分際を鮮明にすることが聖人御一生の生命であったのに、信前信後を語る人は一人もなく、名号に向いておればみな報土往生の行者のように見做しているが、まるで聖人の精神は

丸潰れではないか。

（正安心の説明）真宗の僧侶方は素直な善人ばかりだから、三毒の煩悩は十劫の昔に助かっていることを喜んでおいでになればそれでよいのだ。

（異安心の説明）今逆謗の屍が照らし出されて必死に求道している泥凡夫の心のわかるはずがない。今が生死の苦海だ、いま弘誓の舟に乗らなければ、次の息が間に合わないと必死になるから、開発したとき、信前信後が鮮かに謗得できるのだ。そのときを心命終といい、摂取不捨といい、即得往生住不退転といい、現生不退といい、平生業成というのだ。そこに到達するまでに、一者信心淳からず、若存若亡する故に、二者信心一ならず、決定なきゆえなれば、三者信心相続せず、余念間故とのべたまふ。定心念仏、散心念仏信仰ができて見たり、崩れて見たり、幾度泣いたかわからない。最後に三定死の境地に立ち、往生の望みの絶えたときが自力の機執の浄尽したときで、他力不思議に摂取されたときは同時であったので、学問や理屈や想像や思慮分別

の及ぶところでない。無量永劫の流転の絆が截たれ、ふたたび迷わぬ身になったという大自覚を獲、広大難思の大慶喜を得て信前信後をはっきり説かずにはいられないのだ。説き切らないのは体験がないからだ、その責任はどこにあるのだ。大沼は三千世界の幸福者だ。十方法界のただ一人の仏弟子だ。八万の法蔵を読み破り、三願三経の真髄を得、聖人の真仮を自由に操り、寝ても覚めても南無阿弥陀仏、法を見てよし機を見てもよし、の境地があるから実地に求道せよと言っているのだ。

八　真宗の僧侶よ、これだけの自信を持ちなさい。聖人は「竊に以みれば聖道の諸教は行証久しく廃れ、浄土の真宗は証道今旺んなり。然るに諸寺の釈門、教に昏くして真仮の門戸を知らず、洛都の儒林、行に迷ふて邪正の道路を弁ふることなし」と、大胆不敵な言辞で、これは自惚れではない自信だ。「本派本願寺の危機、どちらが異安心か」（昭和の法論と改名）一六四頁の第一質問書を読んでごらんなさい。余分が少々ありますから深刻に求道される方には無償で差上げます。素晴らしい妙味が

ありますよ。静かに考えてみれば、聖道門の八家九宗は修行する人がいないから証を開く人が一人もいない、それに引きかえ浄土真宗は、証の道が今花盛りとは、七百年の古によくこんなことが言えたものだ。八家九宗は朝廷の保護を受け、叡山も高野山も三千坊、天王寺、建長寺、僧侶は幾千人いるかわからないのに、それをひっくるめて、「諸寺の釈門、教に昏くして、真仮の門戸を知らず、洛都の儒林、行に迷うて邪正の道路を弁ふることなし」とは馬鹿か、狂気しか言えない言葉だ。諸宗の僧侶から言えば、肉食妻帯をした悪魔の坊主よ、同門の僧侶から言えば、背師自立の脱線坊主だから、流罪の槍玉にあがり、生活のどん底におり、弁円の剣の下を潜り脱け、気ども狂ったから暴言せずにはおれなかったのだと見るだろう。けれども、大沼から見れば如来如実のみことと仰げるのだ。大沼がこれを言ったら、十派の学者たちはどんなに嘲笑するだろう。

聖人が二十カ年の修行のとき、聖道門では如実の修行者が一人もいないのだから、

証果を得る者は一人もいない。浄土門は絶対の悪が照し出されて無条件で救済されたのだから、千人いて千人堕る宗教より、一人いて一人救われた宗教の方が百パーセントではないか。今の浄土真宗は死後の夢を見る体失往生を語るのみで、平生業成の心命終を語る人が一人もいない、真仮を知らざるに由りて如来広大の恩徳を迷失しているのだから浄土真宗は丸潰れだ。浄土真宗の僧侶の方々よ、三界の大導師の自覚を持ちなされ、吾れ世の中の眼目とならんの日蓮のように。

堕ちた試しのない人間には助かった自覚はない、死後の往生を語る人間には現在の救済を語る資格はない。

最初の頃は大沼も、素直にいつとはなしに信仰は頂いたと自惚れていたが、調熟の光明に照さるれば照されるほど、自己の罪悪の深さを知らされ、第十八願から除かれた逆謗の屍が自分であって、三千世界のものはみな助かっても、自分一人は助かる柄でなかったと往生の望みの絶えたときと、仏智の不思議に摂取されたときとは同時

であって、三千世界のものはみな堕ちても、わたし一人は助かったのだという大自覚を獲て、聖人は「五劫思惟の願をよくよく案ずればひとへに親鸞一人がためなりけり」と仰せられたが、私は「十方法界わがものなり」の大自信を得て、聖人さま、あなたは七百年の古に尽十方無碍光の大自然を諦得されたのでございますか、それなればこそ、身は流罪に遇いながら、剣の下を潜りながら、死に行く人々の批評くらいでは後すざりはできない、死なぬ仏に生かされたが証拠だと、猛然と進まれたのでございますか。聖人さま御安心ください、七百年後に法龍は生れましたが、あなたの精神を発揮して見せます。難化の三機とは法龍の実機でありました、難治の三病とは法龍の魂でありました、これを導く知識はいないか、これを開導する大徳はいないか、法龍はいま悶死するではないか。刻一刻が無間の深淵に転落しつつあるではないかと往生の望みの絶えた捨自と、他力不思議に生かされた帰他は同時であって、不可称不可説不可思議の信楽、広大難思の大歓喜、地獄一定にこそ極楽一定があり、極悪最下に

こそ極善最上が生きるのだ、本願や行者、行者や本願、彌陀がわしやら、わしが彌陀やら（と言ったら勧学連中は、そんな勿体ないことは言えないと言ったが、一体になっていないものには言えないのだ）機の醜さから言えば下根下劣の悪衆生でも、法の徳から言えば正定聚、必定の大菩薩だ。

この底の知れない苦悩が、明信仏智と晴れた破満の徳の鮮かさ、唯信独達の大法門、信前信後の水際ははっきり立つのだ。真剣に求道した人がいないから、晴れたのやら暗れたのやらわからないから、死んだらお助けに持って行くのだ。今の苦悩が今晴れなくて、平生業成といえるものかい。晴れてない人がいるから、晴れた人がいるのだ。晴れた人が異安心なら、晴れない人は無安心だ。

聖人さま、あなたの流れ汲をみながら浄土真宗の全部の僧侶が、この世ではどうもなれないのだ、死んだらお助けと善慧房の体失往生の味方をしているではありませんか、あなたの真髄の心命終の平生業成を説く人は一人もおりません。しかし御安心くだ

さい、死に行く人々が総がかりで悪口言いましても、死なぬ仏に摂取された私が、浄土真宗の方向を必らず変えて見せますから御安心ください。真宗に開発した人がいないのだから、仕方がありません。開発した人がおるにしても、本願寺から異安心と烙印を押さるるのが堪えられないのでしょう。これには信念と勇断が必要であります。ああ仏智の不思議だこの体験、三仏を生かし、三部経を読み破り、八万の法蔵を諦得さされたのは信の一念で決まったのだが、「これを知らざるをもて他門とし、これを知れるをもて真宗のしるしとする」、この真仮の水際を説くことにおいては、大沼の右に出る者のないほど、はっきり説く自信を持って、いつも布教をしている。それが異安心と総攻撃を受けるのだから、世の中は面白い。ところが悪口言いつつ、大沼の書物を参考にして布教すると参詣が多いと、僧侶から読まれるようになっている。信順を因とし疑謗を縁とする、これも調熟の光明か。有難い。参考に読んでごらんなさい、到るところに真仮の分際が説いてありますよ。

(九) 歎異鈔九節「念仏まうしさふらへども踊躍歓喜のこころ、おろそかにさふらふこと、またいそぎ浄土にまいりたき心のさふらはぬは、いかにとさふらふべきことにてさふらふやらんと、まうしいれてさふらいしかば、親鸞もこの不審ありつるに唯円房もおなじ心にてありけり」

(正安心の説明) これが真宗の一本槍、金看板で、金科玉条のように信奉して、凡夫は慶べるものではない。急いで浄土へ参りたいと思うものはいない。そんな人がいたら、煩悩がないのではないかと怪しく思えとおっしゃってあるのだと、歎異鈔に同調して喜んでいるのである。

(異安心の説明) 歎異鈔の第二節に「親鸞におきては、ただ念仏して彌陀にたすけられまいらすべしとよき人の仰せをかうふりて、信ずるほかに別の子細はなきなり、念仏はまことに浄土に生まるるたねにてやはんべるなん、また地獄におつる業にてやはんべるらん、総じてもて存知せざるなり」の御文をある婦人が聞いて、聖人さまで

さえも浄土に生るるのか地獄に堕つるのか知らんとおっしゃったが、私も知らないのだから丁度よいと言ったが、知らないようが違う。信仰の桁が違うことを知らないのだ。算盤珠でも一の桁をはじけば一、千の桁をはじけば千、同じ一つの味でも桁が違えば九百九十九の大違いができてくるのだ。信前の人がこの九節を読めば、大怪我をするのだ。喜ばれないのを手柄のように思っているが、化土巻に「真に知んぬ、専修にして雑心なる者は大慶喜心を得ず」といわれ、念仏は称えていても信仰が徹底していなければ、大慶喜は得られないのだ。ところが聖人が信一念を説明されては「信楽開発の時尅の極促を顕はし、広大難思の慶心を彰はす」と言われ、「真実の行信を獲れば心に歓喜多きが故に歓喜地と名く」「心多歓喜の益」文類聚鈔には「無上の信心を獲れば即ち大慶喜を得」と、獲信見敬大慶喜、仏言広大勝解者、経には信心歓喜、踊躍歓喜と教えられてあるのに、なぜ真宗では歓喜を使用せず、煩悩の所為とて喜べない方ばかり使用なさるのか。煩悩なら煩悩で、なお喜ばれなければならないはずだ。

罪障功徳の体となる　　こほりとみずのごとくにて

こほりおほきにみずおほし　　さわりおほきに徳おほし。

それが喜べないで邪魔になるのは畢竟僧侶の方が、机上の空論、学問の感情だけで、実地の求道がないから極難信を知らない、極難信を知らないから自力の機執の浄尽された関所を越していない、関所を越していないから信疑の決判がわからない、信疑の決判がわからないから摂取されていないのだ、摂取されていないから平生業成が徹底していないのだ、平生業成が徹底していないから大慶喜がないのだ、大慶喜がないから凡夫は喜べるものではないと言ってるのだ。自分たちが信前の桁にいるとは気がつかないで、信後の第九節のお言葉に調子を合わしているだけだ。それでは聖人の信後の懺悔を、君たちが信前に引きおろして冒瀆しているだけだ。

それなら「念仏しながら踊躍歓喜のこころおろそかにさふらふこと」の意味は、七百年の古の模様を想像してごらんなさい、暗い燈の下で、老の眼をしばだたきなが

ら、六、七十の老境に立ち、死を眼前に控えた唯円坊が、「聖人さま、広大無辺の恩徳を蒙り、往生は一定の大満足を獲ながら、三厳二十九種の荘厳、結構づくめのお浄土と聞かされておりながら、いざ死期が近づいてみれば、飛び立つ思いにもなれず、急いで浄土に参りたいと思う心が出ないとは、何んと浅間しい娑婆に執着の深い心でございましょうか」と懺悔しているのに対して、聖人のお答えが、自分も同じ心で、喜ぶべき心をおさえて喜ばさないのは煩悩の所為であり、「いささか所労のこともあれば」死ぬるのではないかと、いやな心の出るのも煩悩の所為だ、それは信仰とは全然違うので、肉体を持ってる以上は麦飯食うても娑婆におりたいのが凡情だ、急ぎ参りたいと思うのはどうかしている。というので、死に臨んだときに結構な浄土と聞いても飛び立って行きたい心も出ない、踊躍歓喜の心も出ないといわれたのであって、信仰に大慶喜心がないというのではない。真宗では徹底していないから慶べないのを、この九節で誤魔化しているのである。

(十)　末灯鈔に「往生はなにごとも〳〵凡夫のはからいならず、如来の御ちかひにまかせまいらせたればこそ他力にては候へ、様々にはからひあふて候らん、おかしく候」。執持鈔に「往生ほどの一大事、凡夫のはからふべきことにあらず、ひとすじに如来にまかせたてまつるべし。すべて凡夫にかぎらず、補処の彌勒菩薩を初として、仏智の不思議をはからうべきにあらず、まして凡夫の浅智をや、かえすがえす如来の御ちかいにまかせたてまつるべきなり」

(正安心の説明)　様々にとは、あれやこれやと機に首を突っこんで心配するのは可笑しいと書いてあるではないか、補処の彌勒菩薩さえも、仏さまに素直に任しておらるるのに、凡夫の浅智をもって計らうのは無駄骨を折るのではないか、自然というは自から計らわざるなりで、仏さまにお任せすればよいのだと教えているのである。

(異安心の説明)　これは信後の方が書かれたのであって、君たちは表面の文字だけを読んで合点しているだけだ。信前の入口にいて、信後の真似をしているだけだから

易いのだ。真仮を知らざるが故に、如来広大の恩徳を迷失するのだ。君たちは岸から溺れている人を眺めているだけだ、対岸の火事を眺めているから易いのだ、溺れている者が、自分は泳げないから救助に来るのを素直に待っていようと汐を呑んでいる馬鹿がいるか、自分の家が燃えているのに、自分は消火する力がないから他力で消えるまで眺めていようと平気でいる阿呆がいるか。実地の求道がないから、易いという局部しかわからないのだ、後生が一大事になっていない、初めから他力、無力で死後を眺めているのだから真剣味がない。聖人が二十カ年の修行をし、百夜の祈願となり、じり〳〵舞いをした最後が、様々に計らいあうて候こそおかしく候、計ろうて〳〵計らいぬいてみれば、親に計らわれていたのであった。それでこそ自力の機執が浄尽して、他力不思議に眼が覚めたので、凡夫の浅智とも知らず、わかろう〳〵とあせったことが可笑しい、今は法を見てよし、機を見てよし、何んと清々しい境地だろうか。聖人の信後のお言葉を眺めて易い〳〵とおっしゃるのは、あなたの後生の一大事にな

っていないからだ、自分の後生の一大事になった人なら、いつでも信前信後を分けて話すはずだ。

以上は正安心と自任しておらるる方々の安心と、異安心といわれている大沼の安心と、どちらが聖人の真意に順うているか、契うているか、比較したから御覧くださったでしょう。以下も粗末な文章ではあるけれども、浄土真宗の衰滅と興隆の私見を御参考に。観念の遊戯をしている人には、重複々々で馬鹿らしいが、実地に求道している人には苦が抜けるまでは、幾たび読んでも初言に聞こえるのだ。